

氏名	神保 夏子
ヨミガナ	ジンボウ ナツコ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第270号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 マルグリット・ロン(1874-1966)とフランス「三大巨匠」の誕生 フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルをめぐるナラティヴ形成と伝承のボ リティクス

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	福中 冬子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	大角 欣矢
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	片山 千佳子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	土田 英三郎
(副査)	東京大学	准教授		ヘルマン ゴチェフスキ
(副査)	東京大学	教授		渡辺 裕

(論文内容の要旨)

本論文の目的は、フランスのピアニスト、マルグリット・ロン(1874-1966)のナラティヴの変容を通して、同時代の作曲家フォーレ(1845-1924)、ドビュッシー(1862-1918)、ラヴェル(1875-1937)が、近代フランス音楽のカノンとして確立されていくプロセスを、演奏史の観点から明らかにすることである。生前の三作曲家と職業的・人間的交流をもったロンは、20世紀前半のフランスで最も影響力のあるピアノ教育者の一人となり、その晩年には、自ら「三大巨匠」と呼ぶ三作曲家の「伝統」の継承者を自負した。本論文では、パリ・マーラー音楽資料館マルグリット・ロン・アーカイヴの未刊行資料を中心に、「三大巨匠」に関わるロンの言説と、その文脈を成す教育・キャリア関連の資料を網羅的に調査し、ロンのナラティヴ形成の過程とその社会的文化的背景を再構築する。

本論文は以下の全4章から構成される。

第1章では、議論の前提として、フランス音楽史における「近代」という時代の特権的な位置づけと、カノンとしての「フォーレ・ドビュッシー・ラヴェル」の表象の意味合いを確認する。次に、この三作曲家の「伝統」の継承者を称していた晩年のロンの栄華を、彼女が残したフォーレ・ドビュッシー・ラヴェルの名を冠する回想録的著作の背景として描き、同書の成立までの過程を、アーカイヴの書簡・契約書類に基づいて明らかにする。

第2章では、ロンのキャリアの前半をなし、後の「三大巨匠」伝承にとっての「前史」とみなしうる生前の三作曲家との関わりを、ロン、作曲家、周囲の人々の利害やネゴシエーションに照準を合わせて論じていく。第1節ではロンのピアノ学習歴と最初期の活動を概観し、彼女が早くから同時代の作曲家の作品を演奏していたにもかかわらず、フォーレとの出会い「以前」の活動についてはごく消極的にしか語らないことを指摘する。つづく第2節では、ロンとフォーレの関わりを、①作曲家と演奏家②パリ音楽院の院長と教員という二つの角度から概観し、ロンの教授昇進問題をめぐるトラブルから両者の関係破たんまでを描く。第3節では「フォーレの演奏家」から「ドビュッシーの演奏家」へのロンの転身を取りあげ、晩年のドビュッシーとの短い交流に加え、未亡人エンマとの関係性に焦点を当てる。本章の最後では、ロンのピアニストとしてのキャリアの一つの頂点ともいえるラヴェルの《ピアノ協奏曲ト長調》初演とそのヨーロッパ・ツアーの裏幕を、フランス国立図書館音楽部門蔵モンパンシエ・コレクションの資料から詳細に検討する。

第3章では、本論文の中心ともいえる、ロンの「伝統」のナラティヴの形成プロセスを、「三大巨匠」表象

の出現の文脈とともに探っていく。ここでは、演奏家というよりもむしろ教育者・文化人としてのロンの言説や活動の変遷を、ロン自身の社会的地位やアイデンティティの変化とともに検証していく。最初に彼女の勤務先であったパリ音楽院ピアノ科の試験レパートリーの傾向を検討し、院長であったフォーレの作品が早くから積極的に演奏されていたのに対し、ドビュッシーやラヴェルの作品の演奏を後押しする契機は音楽院内にはみられないことを述べる。続いて、現代音楽の教育者としてのロンの活動の中心が、公開演奏講座など、パリ音楽院の外に認められることを示したうえで、「三大巨匠」意識の完成は、「三人目」のラヴェルの「発見」を促したロンの海外渡航にあることを指摘する。さらに1930年代の終りにはロンのステータスが現代音楽の擁護者から大作曲家の回想の担い手のそれへと変化していき、第二次世界大戦期には三人の作曲家をナショナル・シンボルとして称揚する言説が顕著に出現することが明らかにされる。ロンはこの大戦の時期を通じて、亡き「三大巨匠」の記憶の語り手としての地位を獲得したのである。

最後の第4章では、ロンの言説と演奏録音を手掛かりに、最も狭い意味での作曲家の「伝統」、すなわち演奏習慣や様式の伝承の問題を取り上げる。初めに大前提として、ロンが「作曲家の意図（楽譜）への忠実」という「現代的」な演奏上の規範意識を、ドビュッシー、ラヴェルら同時代の作曲家との交流を通じて経験的に内面化してきたことを示す。つづいて、ロンの中にある、作曲家と演奏家との「コラボレーションとしての音楽創造」という視点の存在を指摘し、彼女が「伝統」の原点として参照しているのが、作曲家自身の演奏や助言だけでなく、作曲家とかかわった過去の自分の演奏でもあることを、その言説から読み解いていく。本章後半では、フォーレの小品《即興曲第2番へ短調》作品31を題材として、演奏習慣の伝承にまつわる問題の諸相を取り上げる。具体的には、「フォーレの伝統」の欺瞞性を告発した作曲家の次男の手記を参照しつつ、ロンの言説や演奏録音、フォーレによる楽譜の改訂、研究者の言説といった諸要素を横断的に検討する。そこから見えてくるのは、矛盾をおかしてまで自らの解釈の正しさを「伝統」の論理に基づいて主張するロンの姿であり、同時に、出版譜や作曲家の身内、研究者らの言説によって作り上げられていく、新たな演奏伝統の存在である。

（総合審査結果の要旨）

本研究は、フランスのピアニスト、マルグリット・ロン（1874-1966）が演奏家、教育者、文化発信者として築き上げた「フランス近代ピアノ音楽」のカノンとその構築過程における複雑な動機を、主にロン関係の一次資料から検証したものである。こうした、一人の音楽家に焦点を絞った研究はとかく個人レベルでの伝記研究に陥りやすいが、本研究の目的は、あくまでも演奏史の詳細な検証を通じた音楽史（記述）の再検証であり、そうしたアプローチの必要性が近年広く共有されるようになった中で、大きな成果を挙げた研究として高く評価できるものになっている。また「カノン再検証」という作業の必要性も、広く認識されるようになって久しく、それ自体はやや食傷気味ではあるものの、本研究における未公開一次資料の非常に緻密な検証は、それだけで十分な成果として評価されるべきであるという意見が複数の副査から聞かれた。そうした検証作業を極めて正確なものとし得た、本人の高い言語能力も併せて評価されるべき点である。個人史の検証と、音楽文化形成プロセスおよび作用因子の再考察という大きなテーマとの両立は非常に難しい課題であったが、音楽文化構築における新たなロールモデルを提示した演奏家ロンの活動の検証が、歴史研究の手段として極めて高いレベルで成立しており、今後の研究の指針としても参照されるべき論文となっている。

ただし、論文の完成度に影響する問題がない訳ではない。審査会でも指摘を受けたように、論文全体が読みやすいとは言え、その読みやすさが、本論文が「読み物調」であることに依拠しているのは、たとえば括弧を用いた挿入句が多いこと、思わせぶりの表現や、一瞬トレンドリーなカタカナ用語を多用していることに如実に顕れている。加えて、ロンによる様々な発言や記述を、彼女が意識的に構築した「ナラティブ」として提示しようと意識したあまり、執筆者もまた、意図性をもったナラティブ構築に傾斜しているのではないかという指摘ももっともであると言える。

ただ本論文が、全体として非常に明確な趣旨をもち、論理的なアーギュメントに則り、かつ一次資料に広く裏付けされた研究であることに疑問の余地はなく、高く評価されるべきであるという意見で審査委員会は

一致した。音楽院での試験の実態など、ともすればデータ収集に陥りやすい検証も上手く全体のアーギュメントに組み込んでおり、高い研究能力のみならず、明白な戦略に沿って論旨を展開する能力も証明する、極めて優れた研究として成立している点を大いに評価したい。